

モダンデザインの背景を探る : 1930 年代諸事情その7 : 戦間期英国におけるコスモポリタンの活躍その2

著者名(日)	塚口 眞佐子
雑誌名	大阪樟蔭女子大学研究紀要
巻	4
ページ	89-101
発行年	2014-01-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1072/00003873/

モダンデザインの背景を探る —1930年代諸事情その7 戦間期英国におけるコスモポリタンの 活躍 その2—

学芸学部 インテリアデザイン学科 塚口眞佐子

要旨：1920-30年代の社会背景からデザイン史を読み解くシリーズの8稿目である。今稿は前稿の続編として再び英国のモダン住宅を取り上げる。大陸から遅れること10年、1930年代を過ぎて英国では最初のモダン住宅がようやく姿を見せ始める。大英帝国としての自負や伝統を強く反映する国民性の中、大陸を起源とするモダニズムにどのような層が設計者として住まい手として参画したのか。そこにはコスモポリタニズムという共通項が極めて明白に浮かび上がる。ナチスドイツからの亡命建築家も大きな役割を果たす。ただ、英国のモダニズムはインターナショナル・スタイルではありながら、独自の展開もみせる。ル・コルビュジエが主導した建築への逡巡や懐疑が顔を覗かせ、英国性の付加がみられる。英国に関わりの深いコスモポリタン建築家にこの傾向がより顕著である。今稿では、オールドチャーチ・ストリート64番地と66番地の家、サンハウス、ニュートン・ロードの家、いずれもロンドンの高級エリアに立つ4件の事例を紹介し、前稿と併せて総括を行うこととする。

キーワード：英国のモダン住宅、64, 66 オールドチャーチ・ストリート、サンハウス、ニュートン・ロードの家

I はじめに

モダンデザインの発展経過を観るに、モダニズム運動の胎動は英国から始まるものの、展開局面は大陸に移動し、中核の座と主導権を大陸に譲ることとなる。大陸ヨーロッパとは心情的に一体感を持ち得ないとされる英国の国民性は、1920年代に大陸で花開いたモダニズム運動に、どのように対峙し、進展は如何なる経過をたどるのか。ロンドンでの動きは遅く、30年代も半ばになってようやく視認されるようになる。大陸とはほぼ10年の遅れを見せ、周回遅れ、確信犯的遅れと言えるだろう。英国が遅れているとされた現代建築や現代美術は、国際的であることが肝要だった。その英国においてモダニズムつまり国際性を担う群像は、コスモポリタンだったのである。

前稿では集合住宅ハイポイント(1&II)(1936, 1938)、ウィロウロードの家(1937)、集合住宅ローンロード・フラッツ(1933-34)と3件の事例を取り上げ、共通項を浮き彫りにした。「モダン住宅が嫌われる中、誰が施主になり得たのか。モダン建築を担ったのは誰なのか。人的要素には共通性が鮮やかに浮かび上がることになる。コスモポリタニズムである」と述べた。これに今稿の4例を併せると、施主像と建築家像はさらにその共通性を顕示する。この点については、

ごく一部の社会史家による総括的言及がすでに存在する。前稿ではその嚆矢アンドリュウ・ローゼンの『現代イギリス社会史1950-2000』(川北稔訳)を引用した。モダニズム建築を「その起源においても、インスピレーションの点でも、本質的にヨーロッパ大陸のものである。コスモポリタンであることに価値を見いだすものである。祖国を誇りに思うひとりのイギリス人として、私はコスモポリタニズムを嫌い、軽蔑する」と述べる建築家サー・レジナルド・プロムフィールドの1933年の弁を紹介した。

しかしこの点を包括的に精査したものはなく、今ひとつコスモポリタニズムの実像、およびその必然的展開は見えなかった。この2つの稿でディテールを拾い上げることで、本論のねらいとする、デザイン史が生命を持って浮かび上がることを期待するものである。教科書が視界から排除したこれらディテールは饒舌である。

本論は「モダンデザインの背景を探る」というテーマのもと住宅に焦点を当て、1920-30年代の社会背景をみることでデザイン史を読み解くシリーズの8稿目である。前稿の続編として、英国のモダン住宅4件を取り巻く群像にモダンの進展を追いかける。2章で事例を紹介し、3章で総括を行うこととする。

II モダン住宅とその群像

II-1 チェルシーの2戸のモダン住宅

64 & 66 Old Church St. (1935-1936)

■ 同時進行の2戸の誕生 (1935年 1936年)

ロンドン中心部南西の高級住宅地チェルシー。19世紀からすでに進歩的文化人や芸術家が集積する。彼らの住居を筆頭に、隆盛を極めたクイーン・アン様式がモダン建築への胎動となったことは、論集45号でみている。アヴァンギャルド住宅の集積地はその後、北西のハムステッド周辺に移行するものの、チェルシーは現在でも、文化人や芸術家が好んで暮らす静謐かつ洒落た高級住宅地を維持・継承・発展させている。

文化施設も共存するこのオールドチャーチ通り66番地と64番地（向かいにはチェルシー芸術協会、現在の両隣は建築家ノーマン・フォスター邸と20世紀建築保存活動の20世紀協会）に、いところ同士2人の隣接する住宅計画が持ち上がる。劇作家・プロデューサーで後に労働党下院議員となるベン・レヴィと、もう1人は出版社主で、第二次大戦中フランスのレジスタンスを支援するデニス・コーエンである。両名とも左派政治活動に関係する人物であった。ともに英国生まれでユダヤ系移民の家庭に育つ。華麗な夫妻像を含めそれぞれの人物像は後述する。

共同で土地を購入、66番地のレヴィは住宅設計をナチス・ドイツから34年に英国に亡命していたヴァルター・グロピウスと英国人マックスウェル・フライのパートナーシップに依頼し、64番地のコーエンは同じく亡命者のユダヤ系ドイツ人エリッヒ・メンデルゾーンと以前からの英国在住者ユダヤ系サージ・シャマイエフのパートナーシップに依頼する。（パートナーシップとは、外国人建築家の設計活動に必要な手だてだった。）66番地はグロピウスには英国での唯一の住宅作品となる。

2戸の住宅は異なる設計者といえども一体と感じられる景観を呈している。64番地は保存建築グレードIIに指定され、66番地は、35年5月からのオリジナル図面がヴィクトリア&アルバート博物館に保存され、莫大なディテールを伝えている。

II-1-2 オールドチャーチ66番地の家

■ 66 Old Church St. 劇作家と女優の家 (1935-36)

36年の完成当時、雑誌ザ・タイムズ10月号で「ロンドンの最も先進的建築の1つ」と称される。先進素材にもチャレンジされた。エンパイアステートビル用の輸出レンガNORI BRICKS (IRON BRICKS)の刻



撮影：塚口眞佐子

印一型に裏向きに印字一に由来する名称)、ドイツから導入の実験的塗装材や、グラスクリートなどの新素材が採用された。

フラットルーフ、水平感の強調、横長水平窓、ワイドな引戸開口のテラス、建築化照明、メイン階段はスケルトン（手すり下部は透明ガラス）などモダンデザイン、またスリーピング・ポーチなど実験的スペースを採用しながら、伝統的生活観も垣間見せる。それは食堂やドローイングルーム、育児室などの伝統的室構成に加え、バトラーズルームや秘書室（電話はパントリーに切替え可能）また使用人呼び出しベルの完備など、階級意識の支配から脱却し切れない姿も覗かせる。

劇作家と有名女優の住宅だけに、保守的家庭誌『カントリーライフ』などにも掲載される。見たところ比較的シンプルな造作ながら、仕様やインテリアは装飾的・伝統的である。現代の富裕層が好むモダン空間にアンティーク家具というセレブ的空間の先取りと感じられる。

壁をフラットにするビルトイン家具が多用されるも、壁も含め光沢のあるシカモア材や天然皮革張り、また白壁でも溝堀加工の装飾仕上げと豪華である。シャンデリアやブラケットはクリスタル、家具はアンティークなどラグジュアリー感が漂い、バウハウス流のパイプ家具は登場しない。フリンジ付き絨毯やベルベットやサテンのソファやクッションなどファブリック感も強い。ただし、色彩計画はゾンナーヴェルト邸（論集46号）の個室群のように多彩で、壁にフラミンゴ色や錆色と白のストライプ柄などが用いられている。（装飾に代え色彩を多用するのが初期モダン住宅の流儀で、われわれは白黒写真で見ると、モノトーンと誤解することが多い。）雑誌の紹介記事は、「ウルトラモダン環境に多彩な色彩とアンティーク家具がハーモニー」とまさに言得ている。

■ 劇作家ベン・レヴィ (1900-73)

■ 妻・女優コンスタンス・カミングズ (1910-2005)

レヴィはロンドンにユダヤ系移民の両親のもとに生まれる。第1次大戦中は空軍に属し、18年の除隊後オックスフォード大学ユニヴァシティ・カレッジに入学する。23年に出版界入り、頭角を現し早くも経営幹部に昇進するも、24歳時の作品を始め26年の劇作がロンドンやNYで上演され、劇作家としてのキャリアが展開する。トーキー映画出現で映画台本の依頼が増え、ヒッチコック監督の英国初のトーキーを手がけ、またベルリンにて、ナチス以前のUFAでも活躍する。ハリウッドにも進出しパラマウント映画の監督や台本を手がける。

33年にアメリカ人女優コンスタンス・カミングズと結婚する。彼女はすでに演劇界映画界のスターだった。以後、夫妻とも大西洋をまたに舞台・映画に活躍し、幸せな結婚を全うする。彼女は79年にはアメリカ演劇界最高の荣誉トニー賞のベスト女優賞を受け、ハリウッドのHollywood Walk of Fameに星印も持つ。

彼女はシアトルにて弁護士の父とソプラノ歌手の母に生まれ、早くから舞台に魅せられる。まだ女優に対し偏見の残る中、16歳でデビュー、18歳でNYへ。コーラスガールとして一步を踏む。美貌が映画監督の目にとまり、フラッパーな娘役を皮切りにハリウッドに進出し、レヴィと結婚。多芸多才な芸風で、早くも35年には英国と米国で最も期待される俳優の1人となる。シェイクスピア劇、サルトルやショーの作品などに出演、シリアスな女優としてセレブとなる。最高の演技は71年のユージン・オニール作品と評される。良妻賢母がモルヒネ中毒になる過程をローレンス・オリヴィエ相手に演じ、「オニール作品の最高の感動を呼ぶ演技の1つ」「恐るべき没頭、妥協のない正直」と評された。

一方、レヴィは第2次大戦でも空軍に従軍、諜報活動にも参画し中將に昇格。戦後45年の総選挙ではイートン&スロウ選挙区から出馬、議席を得る。労働党が初めて政権をとった選挙だった。彼は28年から30年にかけて既に労働党に絡む脚本を執筆していた。50年までの議員在職中は舞台検閲制度の撤廃運動、非核武装キャンペーンなどで活躍し、社会主義者フェビアン協会の政治文化雑誌などに定期的に執筆する。労働党議員の国民保険の創設者などと親友で、政治家やジャーナリストを頻繁に自邸に招く。若い演劇仲間や話題の人物、子供の友人などゲストは多彩だった。妻はホステス役を務めた。

彼ら夫妻にとって、施主としての寄与は必然的展開と読み解ける。成功者たる社会的立場、女優というセレブ新参者、大西洋を股に活躍するメディア界の新分野、伝統や地縁に薄い出自、夫の政治的関心方向を鑑みれば、住宅誕生への方向は自ずとモダニストに向かうものと思われる。その維持には妻の演劇人としてのスタンスも奏功する。ゲスト多数を迎え、夫妻とも亡くなるまで住み続ける。モダニスト住宅でありながら調度にラグジュアリーな伝統性をみせる点、それらがすべて夫妻と住宅の必然的展開として帰結するよう感じられる。

関係者は、比較的英国にとどまることが多かったカナダ系英国人建築家フライを除いては、全員がスーパー・コスモポリタンである。グロピウスはこの後ハーバード大学建築学部長のオファーを受け37年渡米する。紀要3号で英国のモダニズムの進展は、コスモポリタンの存在に負うと論じたが、その証例がここにも存在する。

II-1-3 オールドチャーチ 64番地の家

■ 64 Old Church St. 出版家・美術収集家の家 (1935-36)

厳格な幾何学的構成そして水平に広がるホワイトヴィラ 64番地の住宅。道路側では隣接の66番地とインターナショナル・スタイルの連続性あるファサードを呈し、裏側では公園のように連続するガーデンを楽しんだ。設計依頼にその主旨が込められていたのである。

大空間スカッシュコートを邸内に持つ大邸宅で、コートに隣接の食堂は、試合の観客席としても機能した。収集美術品のためのギャラリー住宅でもあった。ガラス張りの外観部分が印象深いのが、これは施主の没後の70年のノーマン・フォスターによる改装の温室である。それでも原型がほぼ維持されていることから、70年には保存建築グレードIIの指定を受ける。フォスターは設計者の1人シャマイエフの特にお気に入りの弟子だった。イエール大学大学院でシャマイエフの指導を受け、修士取得後に所員に誘われる。彼はもう1人の



撮影：塚口眞佐子

設計者メンデルゾーンの価値や、現存作品が極めて乏しい点も熟慮する。(ドイツでの多くは大戦中に破壊) 著名建築家フォスターにとってはこの改装は、「愛の仕事(本人の弁)」で、採算に合わない仕事だった。だが、「メンデルゾーンが体现したものとクリエイティブな対話が出来るのである」と語る。(改装はスカッシュコートをライブラリーに、EV取付け、使用人室の変更などが主で、デザイン改変は出来るだけ避けられ、外壁塗装色も復元された。)

■ 出版社主・好事家デニス・コーエン (1891-1970)

バーミンガムにユダヤ系移民の家庭に生まれる。コーエンの『墓碑銘』には「豊かな家庭に生まれ、若き頃には洗練されたボヘミアン人生を情熱持って追求し、社交界の伊達男をめざした」とある。名門ハロー校からオックスフォード大学トリニティ・カレッジに進む。砲兵隊員として第一次大戦に従軍、後にパレスチナに転戦する。

27年に豪華本の出版社 Cresset Press を設立する。その成功が豪華本の出版ブームを引き起こす。彼は字体デザインや精巧な印刷、進取的なイラストそれらの統合に強い関心を抱いていた。24年設立のタイポグラフィの国際組織 Double Crown Club の初期メンバーでもあり、英国のその分野における卓越した人物と称される。伝統的にこの世界はユダヤ人の活躍の比重が高い。(タイポグラフィとは印刷活字を意味したが、この150年で用紙、インク、書体、レイアウト、イラストなどの統合芸術の地位を得る。) 大恐慌を受け30年代には豪華本市場が崩壊し、一般書籍に切り替えるものの、コーエンは廉価でもデザインの良い出版を続け成功する。その審美感もモダニスト住宅へ導かせた。

彼自身は抑制されたエレガンスを愛し贅沢を愛した。車はグリーンのロールスロイス、衣服や靴は超一流と墓碑銘の通りであるが、意外な一面も覗かせる。第2次大戦中、M16 秘密諜報オフィサーとして奉職し、ナチスが制圧したフランスのレジスタンス活動を支援する。妻や娘が疎開後の自邸は活動家に住宅として開放された。この状態を戦時中維持する。本人もここに暮らし、コーエンの子息は、「大陸の諜報活動に関わっていたため、家はオフィスのような感じだった」と述懐している。

コーエン没後に購入したポール・ハムリン (1926-2001) についても触れておく。フォスターに改装依頼した人物でもある。購入と改装は70年であるが、当時でもモダン住宅への拒否感が存在していた。高層集

合住宅への嫌悪と恐怖でもあったが(紀要3号)、インターナショナル・スタイルに対する障壁は根強く、その中で購入を決めたのは、出版社主ハムリンである。

ベルリンに生まれ1933年にヒトラーの首相就任直後、ユダヤ人亡命者家族として入国している。(この時期の亡命には何より洞察力と資力が必須である。) 父は小児科医師、母は著名な銀行家の出であった。

戦後、祖父の遺産を元手に出版社を起こし、事業拡大。出版帝国と称される。その売却を繰り返し富を蓄積、これをもとに87年に慈善財団を設立。以後、莫大なチャリティ活動を継続し、国内でもっとも気前の良い慈善家・芸術のパトロンと称される。現在では国内最大の独立助成金給付団体の1つとなる。主な寄付先には王立オペラ劇場、ブリティッシュ・ミュージアム、オックスフォード大学図書館などもあったが、一貫して反体制の人であり、障害者・弱者を対象に、また芸術家を対象に慈善活動を行う。98年には建築家リチャード・ロジャースによるテムズ川南岸の再生計画に1700万ポンドを提供する(実現せず)。労働党への最大献金者の1人でもある。98年には一代貴族に叙せられる。

プライベートではコーエンと同じく贅沢好みで、プライベートジェット所有、リヨンの古城購入、その一方でリベラルな左翼一流人士と交際を重ねる。この住宅には死去まで住み続ける。その華麗なキャリアは戦後のもので本論の範疇を超えるが、本人の人的資質、出自、芸術界への接近傾向、左翼を支援しながらも贅沢好みというキャラクターは、64番地66番地の施主と重なり合う。

■ 設計者エリッヒ・メンデルゾーン (1887-1953)

東プロシアの Allenstein (現ポーランド) にてユダヤ系商家に生まれる。全ヨーロッパでもっとも売れっ子の建築家となるが、33年以降は、英国、英領パレスチナ、アメリカと移住を重ねるコスモポリタンだった。

ミュンヘン大学にて経済学を学ぶが建築へ方向転換、ベルリン工科大学に進むも2年後にはミュンヘンにてセオドア・フィッシャーのもとで建築を学ぶ。この変遷を「歴史様式への反抗」と述懐している。12年に卒業即、自身の事務所を開設する。ミュンヘンは表現主義の芸術家団体「青騎士」の本拠地で、彼も表現主義に接近、リーダーのカンディンスキーからは抽象画の影響を受ける。またドイツ工作連盟(論集47号)も注視する。

第1次大戦では技師として東部戦線、西部戦線へ従

軍、終戦後ベルリンに戻り事務所を再開する。戦後のベルリンでは中道左派政治体制のもと前衛芸術が開花する。メンデルゾーンは11月革命支持の芸術家団体11月グループの創立メンバーであり、ブルーノ・タウトやグロピウスが率いる芸術評議会のメンバーでもあった。

まだ作品の乏しい中、19年12月に個展を開催し、戦時中に描いたドローイングを展示する。フリーハンドのパス画で、コンクリートや鉄骨造、ガラスの大開口、歴史様式や装飾の排除など、過去からの明確な離脱を示した。実施可能性も検討されていた。この直後にビッグな依頼が正式に到来する。現存のアインシュタイン・タワーで、教科書には必ず掲載される作品である。

メンデルゾーンは相対性理論が注目される以前から、アインシュタインと理論を熟知し心酔していた。実は妻（有名チェリスト）の友人に天体物理学者がいた。相対性理論を最初に支持し、この論に関する最初の書籍を16年に出版する人物である。彼の伝授だった。日食での太陽光計測で証明可能とされた理論で、天体物理学者はそのためのラボ建設運動を行っていた。ついに18年ポツダム天体物理観測所の承認を受け、即座にメンデルゾーンに連絡する。まだ前線にいた彼は平面と立面の詳細図を送って寄こした。しかし革命や資金不足で延期される。19年11月に元の敵国英国で日食実験が行われ証明されたことで資金が集まり、工事に至ったのである。

建物は新聞の第1面や専門誌の表紙を飾った。展覧会や講演会が開催され、建築家はたちまちスターになる。戦後のインフレの時期も、ほとんどの建築家はユートピア計画で暇をつぶしていたが、彼には依頼が続く。中には新社屋自体が広告と判断された大手の出版や広告会社があった。これはベルリンの高層ビルの1つで、建築家もさらに有名になる、という効果も付随する。

メンデルゾーンは20年代、百貨店設計者としても有名になる。そのデザインは革新的で、従来的高级品用豪華店舗ではなかった。ショッケン・チェーンではその企業戦略が彼の革新的アイデアと重なった。（ドイツ商業界におけるユダヤ系の活躍も目立つ。特に百貨店界では25年の人口比1%弱に対し、79%ときわめて突出した。）

メンデルゾーンはベルリン中心地区で、デパートをはじめシネマ・劇場・店舗複合体、労働組合ビル、ポツダム広場の高層ビル、など多数の仕事を持つ唯一のモダニスト建築家だった（タウトやグロピウスは周辺部でほとんどが住宅）。20年代の絶頂期、所員40名

を抱えヨーロッパで最大の設計事務所となる。設計料は比較的高額だったが、負担できる施主も国際派で、高品質で短い工期が評判を呼ぶ。右傾化・国粹化する社会の中で、それらは常に役所との軋轢を生んだ。その圧力に輪になって対抗する団体Ringの結成にも至る。グロピウス、ブルーノ・タウト、ミース、ペーレンスなどが参画した。その力で建築許可を得た例もある。（ヘルピヒ店舗）

33年ヒトラーが政権奪取、2か月以内にメンデルゾーンは出国する。31年に豪邸の自邸が完成したばかりだったが戻ることはなかった。まずオランダへ出国する。芸術学院創設プロジェクト（フランス）が進行していた。その評議員の代表はアインシュタイン、委員にはライト、ベルラーへ、オーギュスト・ベレ、アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ、演劇学部長にはマックス・ラインハルト、音楽学部長ストラヴィンスキー、など超一流人を招聘する。自身も教授就任予定だった。しかし意見の不一致でこのプロジェクトを断念し、ロンドンに出国する。

ロンドンでは王立建築家協会RIBAが異例の歓迎を示し、サポートされる。英国のモダニスト運動はまだ子供の段階で、メンデルゾーンはすでにドイツの巨匠だった。彼の英国滞在希望に対し、リバプール大学建築学部の有力教授が述べる。「偉大な人物が英国人になろうとしている。……英国に大陸を付け足すようなものである。しかも何のコストも負担しないで」。彼は33年から既に誘いのあったシャマイエフとパートナーシップを組む。インターナショナル・スタイル（当時そう呼ばれ始めた）は英国ではほとんど知られず、海外作品の雑誌掲載はあるも、関心を持つ建築家や施主はほとんどいなかった。この2人も仕事獲得に苦勞する。その中で34年2月告知の英国初のインターナショナル・スタイルの公共建築De La Warr Pavilion (1934-35)をコンペで勝ち取る。そのオープニングで、市長で資金負担した貴族に、「彼のような素晴らしい建築家が帰化申請してくれば幸せに誇りに思う」と言わしめている。同時期に64番地の住宅も手がける。36年までの滞在中、すべてシャマイエフとのコラボでこの公共建築1件と住宅2戸のみが実施作品となる。実績に比べ寡作といわざるを得ない。

この後のメンデルゾーンの足跡は大幅に省略するも、本論の文脈からごく手短かに紹介する。39年に英国の委任統治領パレスチナへ移住する。34年から当地のプロジェクト多数に関わっていた（この時期バウハウス学生や多くの建築家がパレスチナへ移住し、インター

ナショナル・スタイルの設計に従事)。次に第2次大戦直前に正式招聘状を得てアメリカへ渡る。MoMAで作品展や講演などを行い、戦時中はアメリカ政府のコンサルタントとして、ドイツの建設や設計プランニングなどの情報を提供する。53年の死去まで、出版などととも、サンフランシスコにてシナゴークや住宅の設計を行なう。

政治に大きく左右されながらも、才能をもとに若くして花開いた建築家人生だった。世界を巡り自身の国籍すらおぼろげなスーパー・コスモポリタンとして、紀要3号でみた英国モダニスト建築家像とぴたりと重なる。

■ もう1人の建築家サージ・シャマイエフ (1900-96)

64番地のもう1人の建築家シャマイエフもまた時代に翻弄され、波瀾に富む人生を歩む建築家だった。ロシア共和国グロズニー(現チェチェン共和国)の石油会社を営む裕福な家庭に生まれる。ユダヤ系ロシア人だった。早くから名門ハロー校へ留学させられ1910年に英国移住、17年に卒業する。ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに進学予定のところ、ロシア革命で資産すべて失い世に出る。短期の通訳を務め、18年から23年はジャーナリストの傍らジャズやダンスの趣味を深め、雑誌 *Dancing World* の編集などとともに、自ら国際タンゴ競技会に出場、優勝し、アルゼンチンで2年間過ごす。

一方でデザインへの関心を深め、22年から25年にかけてヨーロッパ各地で建築と芸術を学ぶ。ロンドンのインテリア会社での商業施設や住宅経験を皮切りに、31年に独立し、ロンドンでもっとも有名な青年インテリアデザイナー事務所となる。メンデルゾーンとパートナーを組む2年前だった。正式な建築教育は無かったが、モダンの先鋭を行く作品を手がける。建築家としての出発はRIBA正会員となった33年以降である。その初作は同年のラグビー校教授の住宅で、白い小さなキュービックだった。この建築中にメンデルゾーンとパートナーを組む。13歳という年齢差以上に、片やドイツのモダニスト巨匠、片や駆け出しの若手だった。シャマイエフ自身も、メンデルゾーンから多くを学んだと語る。

2人で前述の建築コンペに優勝を果たす。シャマイエフはインテリア出身ながら、コラボ3作における2人の領域特定は困難という。メンデルゾーンは22年に目の手術をしており、小さな縮尺のスケッチ以上は描きにくくなっていた。加えて技術知識はアシスタントに

頼ることが多かった。これらの点から、2人のキャリア差から想像される協働のみではなかったことも窺える。

メンデルゾーンがパレスチナへ去り、パートナーシップは解消され、シャマイエフは独立し代表作となる自邸を手がける。Bentley Woodである。35年に英国南部サセックスのベクスヒルに貴族の所有地52万㎡を購入する。同年1月に工事が始まったばかりのコンペ作の近隣だった。19万㎡が森林でその名が自邸名となる。自邸はフラットルーフ、長方形ボックスの幾何学構成の大邸宅だった。ただし環境からコンクリートではなく木造で、南斜面に配置する。南側は大開口で日本建築を思わせるガラス引戸でリビングとテラスを連続させた。

周辺から住宅を窺うことも不可能な広大な立地ながら、地元当局は地域のアメニティを著しく傷つけるとして拒否する。その頃の無秩序な開発を防ぐための建築条例を盾に、「サセックスの魅力は維持されるべきで、何であれ外国のものの導入には最大限の注意が必要である。近代的な開発を妨害する立場を取る意図は無いが、異国的様相の建物がサセックスを侵略する懸念がある」との意見表明を行う。これに対しシャマイエフは厚生大臣に公平な判断を求め、公聴会が開催され、建築界や芸術界の有名専門家が多数意見を提出する。地元当局の主な反対は、レンガでなく木造という点、またフラットルーフは地域に調和しないという主張だった。本当の理由は、何であれ異国の思潮への、また新規性への、英国伝統の反感であることは明らかである。シャマイエフは反論する。木造はサセックスの主要な伝統であり、近隣のリージェンシー建築もまたフラットルーフであると。彼の主張が認められ、37年10月に許可が下りる。

この経過は1人の建築家と地元の論争にとどまらず反響を呼び、英国建築界にて広範囲に論議された。アーキテクツジャーナル誌は、「もし地元当局の反論が認められるなら、住宅開発業者が好む過去の建築イミテーションの安物がまかり通り、建築家の危機となる」と指摘し、また建築デザインの向上を意図とした条例が、逆にそれを上回る作品の攻撃に使われようとする皮肉を指摘した。そして、「近い将来、建築家のサインがあるだけで拒絶に値する」可能性を示唆し、痛烈に批判した。

シャマイエフは完璧な景観を求め、まる1年かけ庭園家と設計を進め、構造家の力を得て38年に完成させる。友人の芸術作品も配置された。特にヘンリー・ムーアの彫刻は有名である。この散財がたたりわずか

数ヶ月過ごただけで破産し、家族とともにアメリカに移住する。

アメリカでの状況もごく簡単に触れておく。40-41年にはカリフォルニア芸術大学で教え、サンフランシスコにて地元の建築家とコラボの後、NYに移る。ブルックリン・カレッジの芸術学科の教授就任だった。先に渡米していたモホイ・ナジやグロピウスなどバウハウス関係者などにサポートされ、教員人生を開始する。その後の経過は、85年にシカゴ芸術協会で収録のインタビューに詳しい。モホイ・ナジ没後、グロピウスに推薦されシカゴ芸術大学の学長を継ぐ。46-51年にかけてシカゴの重要な教育機関で偉大な功績を残した、と賞せられる。この大学がイリノイ工科大学に合併のため辞職、短期間マサチューセッツ工科大学で教えた後、53年にハーバード大学大学院教授となる。都市計画を専門に精力的に活躍する。62年にはイエール大学の教授を務めノーマン・フォスターなどを指導し、70年代にリタイアする。シカゴやボストンで個展も開催、著作も多く詩集まで出版し、生涯詩人だったと称されている。

II-2 サンハウス (1934-35)

■ ハムステッドのモダン住宅

文化人や芸術家が好んだハムステッド。その一方で、オスカー・ワイルド裁判で注目された同性愛者、産児制限論の英国のパイオニア、精神分析家フロイトなど論争を呼ぶ人物のハブでもあった。進歩的知識人が居住し、ハムステッド・インテリとは左翼文化人を意味したのである。左翼たるモダニストの実験住宅が存在し、芸術家に加え MARS グループに属する哲学者、映画人、音楽家もここに集結した。彼らが理想とした階級差のない未来社会への創造、という社会主義イデオロギが作品に現れた。彼らがかもすオーラや学識も土地柄に加わる。

高学歴富裕層の好む土地でもあった。中でもサンハウスの立つフログナルは、すでに19世紀後半からその傾向が際立ち、1923年以降この界隈は戦間期におけるハムステッド・ハウジングのショーピースと称された。28年から35年にかけて少なくとも建築家作品5戸が近接して新築され、それらは9番地のヴィクトリアン期の大建築家スコットの孫の建築家の自邸(1930)、隣は教会などの有名建築家の作品、その隣がサンハウスで、1軒おいてRIBA賞やソーン賞受賞者の作品(1925)が並ぶ。それらのネオ・ジョージアン様式をはじめ、当時、ベグスナーがヴィクトリアン・

パターンと称したスパニッシュ・コロニアル、南アフリカのオランダ様式なども混在した。一般に新築住宅はレンガのジョージアン建築で、それらはモダン住宅とは調和しないと考えられていた。

つまりは裕福な土地柄としてモダン住宅への反感も存在したのである。フログナル66番地のコンネルとウォードのモダン住宅は「過去に犯された中で最大の奇形」と国会議員が発言する。この近隣に隣接するフログナル59、61、63番地の3軒はマナーハウス取り壊し後の38年に、ファサードの調和を保つため同一の建築家に依頼され、その建築家が中央の61番地に住んだ。施主は同じく並びの65番地に34年にすでに自邸を新築していた。土地柄に対する施主の危機感が窺える。

サンハウスはホワイトの鉄筋コンクリート造、パノラマを提供する水平連続窓、周囲を見下ろすルーフガーデン、斜面ゆえのピロティ、とモダンアイテムが揃う。ピロティには車庫やサービス機能を納め、メイン階をコルビュジエのサヴォワ邸のように持ち上げる。フリープランではないが流れるような空間を生み、異なる用途を合理化する。とはいえ英国らしくメイン階でもサービスエリアには段差をつけ明確に空間分離する。

サンハウスは英国の建築家が真のモダニスト原理と考えていたものを体現したインターナショナル作品として、保存建築グレードIIにリストアップされている。



撮影：塚口眞佐子

■ 建築家マックスウェル・フライ (1899-1987)

カナダ系移民の父のもと、英国チェシャーに生まれる。第一次大戦末期にドイツ占領地区に派兵され、除隊後特典としてリバプール大学建築学部に入學する。24年に優秀な成績で卒業、いったんNYで勤務した後、Adams & Thomas設計事務所に入る。ここでは24年からカナダ人建築家ウェルズ・コーツ(紀要3号)が勤務していた。コーツはフライに、リバプール大学で学

んだ古典主義を捨て、コルビュジェに従うよう勤める。

33年に亡命の建築家を、彼は英国の建築家としては異例に歓迎し、34年にグロピウスとパートナーを組む。しかしながら彼のモダニストへの転向は段階的だった。主に Design & Industries Association のメンバー活動を通してで、この協会はドイツのモダンハウジングを紹介する。フライは「まさに自分の方向を示しているものだった」と語る。とはいえ Adams & Thomas で32年に手がけた住宅は、洗練されたネオ・ジョージアン様式で、20年代のリバプール大学教育の典型だった。それでも、28年にコルビュジェとグロピウスがパリに設立した CIAM（国際モダン建築会議）に影響を受け、33年に、コートとともにその英国版 MARS を結成する。

グロピウスの渡米後は、コラボ作の Impington Village College をコスト削減のためデザインを再考し、工事監理を行なう。代表作ロンドンの労働者向け集合住宅ケンザルハウス（1936-37）は社宅で、施主の企業が大きく宣伝し話題になる。39年には RIBA のフェローになり、建築家として地位を固める。戦中には王立技術局に奉職し主要な役職に就き、西アフリカの都市計画アドバイザーなどを務める。戦争初期には MARS が提案したロンドンの都市計画に関わる。子供時代に見知っていた労働者スラムの改善という情熱の現れであった。

夫妻は共著でまた単独で書籍を多数出版し、フライは RIBA のゴールドメダルを授与されている。66年にロイヤルアカデミー準会員、72年には正会員となる。妻も DBE（大英帝国第二級女性勲爵士）を授与されている。

II-3 ニュートンロードの家（1937-8）

■ バディントンのモダン住宅

ハイドパークの北に位置するバディントン、閑静で緑豊かながより都市的環境である。19世紀に開発され新古典主義のホワイトヴィラが立ち並ぶ（現在はホテルなどに転用）。ここに建つニュートンロードの家は、23歳のデニス・ラズダンがウェルズ・コート事務所に在職中に、個人で手がけた作品である。（コートは東京育ちのカナダ人建築家で、ハムステッドに先鋭的集合住宅ローンロード・フラッツを設計。紀要3号）このニュートンロードの家は、「英国人建築家による、都市部の独立モダン住宅として最も初期の1つ」と称されるが、デニス・ラズダンも英国人ながら、他のモダニストと共通項があった。東プロシア出身の裕福な

ユダヤ系ロシア人移民の父と、ユダヤ系オーストラリア人芸術家につながる音楽家を母に持つ出自だった。

ニュートンロードの家は、画家 F. J. コンウェイのアトリエ住宅で、ピロティや水平連続窓を持つ4層のボックスである。クック邸がモデルでコルビュジェの鋳型にはまった作品とされる。コルビュジェも個人的に賞賛する。確かにコルビュジェの参照は23歳にしての初作として、まず確実なパフォーマンスだった。（ラズダンはコートを生涯の師と仰ぎ、リュベトキンにも私淑する。）

最上階の中央にバルコニーの開口を持つファサードも、規模こそ違えコルビュジェのガルシェのヴィラ（論集46号）も想起させる。ただしホワイト1色ではなく、側面とファサードにハイポイントIIと共通材のタイルゾーンを持ち、印象は穏やかである。異素材仕様は、紀要3号でみたウィロウロード2とハイポイントII、今稿のオールドチャーチの家にも共通する。前稿の例はいずれも近隣への懐柔策でもあった。

室構成も曲線間仕切りのフリープランというクック邸と大きく異なり、LDこそワンルームであるが、それ以外は英国の伝統的室構成に準じる。すなわち、地階やサーバントホールなどを持ち、使用人ゾーンを厳格に分離した区画構成で、これもまたウィロウロード2やオールドチャーチの家にも共通する。異素材使用や室構成はモダニズム原理主義ではなく、忌避されたモダン住宅が、英国独自の進展を遂げるための過程であろう。

既存の樹木を残し南面に緑地を保全するため、あえて近隣と壁面を揃えず、セットバックさせる。前庭は庭園や車庫へのアプローチとオープンにされた。近隣との壁面不揃いが最初の申請で当局から指摘され、再申請になるも大幅変更には至らず、景観との不調和もさほど問題視されることはなかった。オールドチャーチでも目立った反感の動きはつかめていない。紀要3号でみたハムステッド近辺の3例は強固な反感に遭遇し、今稿のシャマイエフの自邸も然りである。バディントンやチェルシーという、ハムステッドなどに比べ都市的環境の土地柄も奏功したと思われる。ウェストエンドにもほど近く、映画館などの新奇な施設や、モダンを意識し表面だけ真似た商業建築も、遥か彼方ではないエリアだった。前稿でみたコートの代表作高級集合住宅エンバシー・コートも辛辣な批判は受けていない。海浜という立地、集合住宅というよりホテルライクな風情や入居者のステイタスが、デザインへの許容と憧憬を招いたとも思われる。モダン建築への反感も一様ではなかったのである。

それでも、ニュートンロードの家の50年代の売却時には興味深い逸話がある。購入者は、パンチ誌やニューヨーカー誌、広告業界で活躍する有名イラストレーターのロナルド・サールと、彼をプロデュースし世に出す妻のカヤ・ウェップで、彼女も有名ジャーナリスト・出版家だった。彼らは「良い買物をした」と称される。つまり、「将来の国立劇場の建築家の作品が安く買え、先見の明があったことになる。この家のモダンさは購入検討者たちをギョッとさせ退散させたのである」とある。モダン住宅にまだ拒絶感が持続していたと断定できよう。

その購入検討者たちはどんなインテリアを見たのだろうか。RIBAが興味深い写真を保有している。竣工当時のインテリアで2パターンある。いずれも同時期の撮影である。1例はモダン家具によるインテリアで、アルバー・アアルトの椅子などが置かれている。これらはリビングの2カットと家具のないアトリエ1カットのみである。他方はクラシックやアンティーク家具が多数配置された写真で、玄関ホールから複数のアングルによるLD、寝室と圧倒的に豊富である。これは以下のように考えて妥当と思われる。つまり、いったん建築家がプレス発表用にイメージ通りの撮影し、その後に住まい手による実際のインテリアが撮影されたとみる。これにはベルシャ絨毯も加わり、寝室の横長窓へは不似合いな、丈の短いプリントのドレープカーテンも登場する。驚かされるのは、シンプルなLDの壁面に組み込まれたバロック調装飾の暖炉である。施主の懇願であったのか。

施主 F. J. コンウェイという画家の人物像は不明である。資料にはモダン住宅が希望されたとある。しかし、竣工直後の伝統家具の充実ぶりから、モダン住宅を希望といえども、施主の美学はパイプ家具でなかったと推測される（バウハウス調家具がモダニストたる者の美学とされていた）。この落差はオールドチャーチの家にも共通する。彼らの、時代の先端をいく自己イメージ表出への指向と、伝統的ラグジュアリーへの嗜好の共存である。

■ 建築家デニス・ラズダン（1914-2001）

モダン運動のヒーロー的ディフェンダーと認識される建築家である。攻撃のターゲットは保守主義者、地域の反対運動などからで、ラズダンのマッシブなコンクリートやガラスの構造体が批判的になった。メリットが何であれ、環境やコンテキストの無視とされた。

しかしラズダン自身はモダン運動のオーソドキシ-

つまり正当性や教義には懐疑的で、建築とはユニバーサルに適応できるプログラムの表現というより、特定の課題を特定の研究し解決する成果であると考えた。彼にとって土地のコンテキストや歴史は重要で、コルビュジェを尊敬するも、彼の都市生活観は固く拒否した。モダニズム原理主義とは距離を置いたのである。それはこれまでみた英国のモダニスト建築家大半に共通の資質と感ぜられるが、デニス・ラズダンとはどのような人物であったのか。

両親はユダヤ系移民であった。技師で建設関係の実業家の父は東プロシア出身のロシア人移民だった。いところには舞台美術家もいる。母はユダヤ系オーストラリア人画家の孫で、その一家はタバコの木箱製造業を営んでいた。木箱のふた（5×9¹/₂）を子息の前衛画家仲間画材として提供し、またその画家仲間のために自邸をオープンハウスとして開放する。このような家系に育つ母自身は才能豊かな音楽家で、芸術界のモダニスト運動の熱心なサポーターだった。ラズダンの父は5歳のときに死亡し、母が息子の教育と進路に多大な影響を及ぼす。

英国で生まれパブリックスクールの名門ラグビー校を終え、短期間、王立音楽大学に学ぶも進路変更し、AAスクールに進学する。母の友人が送った英訳直後のコルビュジェの『建築をめざして』に感銘を受けての行動である。学生の身でMARSに入会する。30年代前半のラズダン在籍当時のAAスクールは、大陸のモダニズム旋風に巻き込まれ、アンチ・ボザールの教育改革がまさに進行しようとしていた。それでも、36年のラズダンの論文は「論が現実より大きくのさばるこの時代の毒に明らかに犯されている」と教授から評される。彼はパリを訪れ、コルビュジェのクック邸やスイス館も見学する。

コート事務所を経て、37年にニュートンロードの家の完成直後にリュベトキンのTECTONに入所する。大戦中は英国砲兵隊と工兵隊に所属し、Dデイにフランスに上陸する。MBA（大英帝国第5級勲爵士）を授与される。ナイト爵位を得てサーの称号で呼ばれるまでの活躍は戦後で、本論の範疇を超えるが簡単にみておく。

戦後46年に32歳でTECTONのパートナーの地位を得るも、48年に解消し独立する。同僚のリンゼイ・ドレイクとともに、TECTONで手がけていたホールフィールド地区計画を完成させる。これは無人爆撃機によって破壊されたベイズウォーター地区（パディントン（西））の小学校を含む再生だった。もとはアッパー

ミドルの住宅地だったが、戦争被害が彼らへの仕事につながり、ここに8階建て板状住棟をクラック型に配置している。労働党政権の時代であった。この作品は彼の機能主義拒否の例証とされ、自身の手法の最初例とされる。

この設計プログラムが労働者階級のベスナル・グリーン地区再生（1952-57）にも反映される。コミュニティ強化を意図した計画で、93年には戦後の公共住宅として初の保存建築グレードⅡに指定される。社会派建築家としての活躍の一方で、富裕層のセントジェイムズパークに高級集合住宅も計画する。近隣のパラディアン様式に配慮し、自身が親近感を抱く古典主義を取り入れデザインする。若き頃、ヴィクトリア朝建築家の厳格なシンメトリーや、バターフィールド設計のラグビー校のチャペルに感銘を受けていたラズダンだった。

代表作のひとつ、王立医科大学関連の出所は所員経由だった。AAスクールで教えラズダンの所員となる学生は、王立医科大学の建設委員会有力者を父に持つ。リージェントパークに建設地を保有し、ここの象徴ジョン・ナッシュの古典主義にならう建築が可能か、委員会に問われ、「ナッシュのテラスと一致させよう、真似ることなく」と返答する。これ以降、この大学との関係が続く。

モダン建築も推進する。イーストアングリア大学をコンペで手に入れる。60年代の新設大学ブームが、才能ある若手への機会提供になっていたのである。ロンドンから遠くノリッジ郊外の緑地に立つ大学は、テラスやアッパーデッキを持つジグザット型校舎とされた。歴史文脈を持たない立地で、周囲との軋縁とは無縁、60年代の英国の建築イメージのひとつとなる。

このステップ型を歴史と伝統のケンブリッジ大学クライストカレッジの居住施設にも採用する。しかしこれはまるで土手と批判され、リバプール大学のスポーツ施設もエレガントなジョージアン建築への突然の侵入と批判される。批判の中でもっとも有名なのは、チャールズ皇太子の発言で、テムズ川サウスバンクの国立劇場が標的だった。63年の設計指名、69年工事開始、76年のオープンの劇場を、チャールズ皇太子は「原子力発電所をロンドンの真ん中に誰にも気付かれないよう作るかしこいやり方」と痛烈な批判を発する。

77年にはRIBAゴールドメダルを授与され、91年には王立アカデミー会員に選出される。97年には回顧展が開催され、建築家仲間が国立劇場擁護のラリーを繰り広げている。モダニストそして英国を代表する建築家であった。

Ⅲ ロンドンの30年代モダン住宅 その総括

■ 7例の施主像と建築家像 大陸との温度差

7例の建築家像と施主像には共通項が顕示される（後述）。施主像と生活者像は英国以外をみた論集45号46号とも共通する。芸術界に関わる富裕層、高学歴、政治的に左派で革新という点である。モダニズムとは紛れもなくエリートの運動であり、少数の知識人のみが享受可能と思えた感性を育てたのである。加えてモダン芸術家はしばし左翼や共産主義者と同等視された。英国でも30年代も半ばになると、とりわけ知識人は政治の左右陣営に組み込まれ、多くの若手芸術家や科学者は共産主義へ関与した。これらの傾向はどの事例でも顕示された。

その一方で建築やインテリアでは、ナチスからの亡命者とは別に、英国生活の長いコスモポリタン建築家は、モダニズム原理主義への逡巡も顔を覗かせ、伝統の英国ならではの展開も窺える。前稿の3作はさまざまに装飾的ディテールや素材が付加された。ウィロウロードでは外観や室構成に加えインテリアでも装飾が充実し、ハイポイントⅡの外観は周知の通りである。この最上階の建築家自邸のカスタマイズは当時のモダニスト美学どおりではない。ローンロード・フラッツも内装に贅をこらした。今稿でも特にインテリアはピュアなモダニズム概念を形成しない。伝統的価値観の付加が随所に窺えるのである。英国生まれの建築家マックスウェル・フライとデニス・ラズダンは、両者ともモダニズムへの耽溺が段階的であり、モダニズム批判、コルビュジエ批判も顔を覗かせる。それは亡命者でないリュベトキンやゴールドフィンガー、シャマイエフでも同様である。どこか英国の伝統が出現する。

■ 英国の住まい感 その伝統

『現代イギリス社会史 1950-2000』（アンドリュー・ローゼン著 川北稔訳）は社会史には珍しく建築への言及が手厚く、英国人の住まい観が概観されている。「概して資産のあるイギリス人は古い家に住むか、伝統的な様式で建てられた新築家屋に住む方を好んだ。インターナショナル・スタイルは、イギリスでは始めから容易ならぬ障壁に直面していたのである。この障壁は、民間の住宅にかんする限り、決して超えることができないものであった。民間住宅については、ジョージアン様式の町家から、ヴィクトリア朝の教区主任司祭館その他のあらゆる種類のイギリス風の住宅まで、非常に豊かで、多様性に富んだ建築の伝統があったから、モダニズム様式の邸宅が買えるような資力のある

人こそ、かえって歴史的な雰囲気を持ち、そうした外観を保っている住宅を望んだ。十分な資金を持っている人にとっては、素晴らしい庭付きの旧家であっても入手可能であったし、こうした住宅こそは、たいいていの新築家屋よりは暖かみと品性があった。たいいていのイギリス人は、自宅が慣れ親しんだ特徴を持っていると感じたがっており、そのため、開発業者が建設した住宅のほとんどは、ネオ・ヴィクトリア様式の装飾レンガなり、ハーフティンバーのファサードなりを極めて月並みな建物につけるなどという形式で、イギリス建築の特徴を維持していた。もちろん例外はあったが、こういうものはマニアの領域にとどまっていた」と語る。

30年代は住宅ブームを迎えていた。都市郊外を中心に民間住宅の建設が進み、労働者向け公営賃貸住宅が大量に建設された。戦間期に合計430万戸が建設される。第二次大戦直前時の全戸数の1/3に相当し、7割が民間住宅だった。物価の下落と生活水準の向上、低金利政策、これらを反映し住宅価格が相対的に安く、また30年代の新機軸・分割払い制度の普及と低い金利で、住宅購入には極めて有利だった。中流階級は郊外の持ち家、労働者階級は公営賃貸住宅（スケールメリットを追求し、同一規格で建てられた）、という新しいパターンが生まれた。

「住宅革命の時代」とはいえ、それら新築戸建て住宅はローゼンの指摘通り伝統的住宅だった。最高級を評する常套句「株式ブローカーのチューダー調」を筆頭に、資力に応じ様々なバリエーションが存在したのである。20世紀末を迎えても、嫌われるのは築60年の2戸建て住宅ではなく、築30年の高層アパートだったという。

嫌われた理由に、前稿でも確認した高層アパートの持つ労働者階級イメージもあったが、モダン建築に英国人が馴染めない理由をローゼンは「光の問題」と総括する。「大きくて数も多い窓は可能な限り外光を取り入れ、白一色のインテリアの表面はその光を反射して、輝きと白さは清潔感を醸し出し、新たな出発と歴史の拒否を意味する。」と語る。つまり、歴史は混乱した暗く汚いものとみなされ、歴史の拒否が新しい社会の誕生に寄与する、というモダニストの主張は、経験論的な英国の伝統には受け入れられなかったと分析する。ガス灯の家庭到来時にもその明るさが好まれなかった、との史実もある。

■ 建築家と施主 そのコスモポリタニズム

英国の歴史性に距離を置くコスモポリタン、その彼

らが国際性を標榜するモダニズムを牽引したのである。これまでみた建築家の多くは、激動の歴史また芸術史をなぞるように、東欧出身、パリやドイツを経由し渡英している。33年以降はナチスドイツの亡命者も加わる。

亡命者を含むコスモポリタン建築家そのほとんどがユダヤ系を出自に持つ。施主や関係者も同じである。これは筆者の恣意的な事例選択ではなく、30年代英国の主要モダン住宅を取り上げた結果である。ユダヤ系出自の多さの解明は本論の根幹ではないが、『第三帝国の社会史』（リヒアルト・グルンベルガー著、池内光久訳）の反ユダヤ主義を解明する総括が演繹可能と思われる。以下の1段落でごく部分ではあるが要約する。

19世紀後半からの反ユダヤ主義には経済的底流と知的底流という2つの底流が存在した。経済的底流とは、高度に円熟した資本主義出現に対する防衛的な反応であり、ユダヤ人は変革の代理人として、自由貿易や商業広告、割賦販売などを手がけ既存の商業界に割り入った。都市化、商業化、ホワイトカラーの専門化、という20世紀の趨勢を先取りしていたのである。知的底流として、合理主義、啓蒙された個人主義などの、近代性の側面や近代性という異質な概念に対する反発や抵抗が存在し、それらから派生した「墮落した影響力」に対して、自国の民族イデオロギーを攻撃や防御に用い対抗した。

以上はモダニストのユダヤ系出自、およびモダニズムに対する全般的な抵抗への、ごく荒削りながら深層的解明の一助になると考えられる。（30年代半ば、英国ファシスト連合の支持獲得の唯一の勝因は、イーストエンドのユダヤ社会への憤慨を大衆に煽動したことによる。）

英国への亡命建築家への処遇もこれに準じた。すでにみたグロピウスとメンデルゾーン以外に、アドルフ・ロースやマルセル・ブロイヤーも亡命者の1人だった。彼ら有名人4名を含む25名は、設計活動許可が得られた少数派だった（ただし4名の滞在は短期間だった。米国から遥かに魅力的な招聘を受けたのである）。亡命が始まる33年に英国で彼らを歓迎したのは例外的だったのである。建築界の伝統的な自国指向、また経済恐慌の余波でモダニスト建築家に実験の機会が希有だったことが理由である。その事情をピーター・ラスコーの *The Impact of German-Speaking Refugees in Britain on the Fine Art* を以下の3段落で要約し伝えたい。

38年までの亡命建築家の数は非常に少ない。39年初期では労働許可書の所有者は上記25名である。（以

降ドイツ出国は開戦で事実上不可能になる)。それ以外の52名(ドイツ、ナチスが支配したオーストリア、チェコスロヴァキア)の申請に対し、RIBAは驚愕し、この問題の審査委員会を立ち上げる。39年1月に議会に報告する。「入国者数は少ないとはいえ、犠牲の問題も生じている。しかしわれわれ建築家は、状況に応じモラルに則り最大限の善意で義務を果たす種族と考える」。審査の結果、志願者52名のうち18名が推奨可能と意見がまとまり、残りは時間をかけ審査となる。「許可書の発行数は注意深く管理されている」との発言から、RIBAが善意の大盤振る舞いをした訳ではないことがわかる。

モダニズムへの許容が希薄なこともその理由となる。評論家やジャーナリズムは比較的同調的だったが、コンペでは伝統的な作品が選ばれ、モダン建築家が仕事を獲得するのは困難だった。もちろん英国人とのパートナーシップでも同様だった。それは芸術界全般にも共通した。36年のナチスの「頹廢芸術展」で抹殺された芸術家の亡命に関しても「作品は英国の一般大衆に受け容れられなかったばかりか、全体としては芸術家や評論家にも同様だった。ほとんど同じ否定的反応とは皮肉である」とする。

20年代遅くからモダニズムにおけるドイツの重要性を認識していたハーバート・レッドは、33年に著書の冒頭でドイツの状況に警鐘する。「現在の独裁制が権力を握る以前は、ドイツのモダン芸術はヨーロッパで比類なき評価を享受した。一流芸術家のほとんどは公立芸術学校で地位を得、間接的に国家援助を受けた。そのような立場から来た有名人や無名人、彼らは様々な違いや露骨な敵意にさえ出会い、堪え難く理解できないこともあった(やや曖昧な記述だが)。しかし同時に多くの個人や新しく設立された支援団体からの温かい善意や資金援助も含めた支援を受けた」と語る。

最後にモダニズム建築への強い嫌悪感をローゼン(川北稔訳)より引用し総括の一助とする。チャールズ皇太子による1989年制作の著書と映画『イギリスのヴィジョン』での発言である。

「われわれは長いあいだ、一種の特徴のない、くだらない、寄せ集めのインターナショナル・スタイルの建築物を推しつけられて苦しんで来たように思う。こんなものは、[サウジアラビアの]リヤドから、[ミャンマーの]ヤンゴンまで、どこにでもあるものだ。われらがイギリスに固有の様式や個別の特徴は、いまやこの忍び寄るガン細胞に食い荒らされてしまっている。格別に豊かなわれらが過去の建築を再発見すべきとき

は熟した。」

参考・引用文献

- 1) Jones, Edward, & Woodland, Christopher, *A Guide to the Architecture of London*, Third Edition, Seven Dials, Cassell & Co, 2000
- 2) Mosse, Werner, *Second Chance: Two Centuries of German-Speaking Jews in the United Kingdom*, Mohr, 1991
- 3) Humberts, Chesterton, *News and Views: Home designed by founder of the Bauhaus*, 2013
- 4) UNT Digital Library, *66 Old Church Street*, University of North Texas, 2013
- 5) Backe-Hansen, Melanie, *Flat by the founder of the Bauhaus*, Country Life, 2009
- 6) Hitchcock, Alfred, *Obituary-Benn Levy*, The Times, 2003
- 7) News Obituaries, *Constance Cumings*, The Independent
- 8) Mcfadden, Robert, *Constance Cummings, 95, Movie and Stage Actress, Dies*, The New York, 2005
- 9) Daunton, Martin, *Housing/The Cambridge Social History of Britain 1750-1950: People and the Environment (002)*, Cambridge University Press, 1990
- 10) Worsley, Giles, *Master Builders: Serge Chermayeff (1900-1996)*, The Telegraph 2003
- 11) *Serge Chermayeff architectural records and papers*, Avery Architectural and Fine Arts Library, Columbia University, 2005
- 12) J. Blum, Betty, *Oral History of Serge Chermayeff*, Art Institute of Chicago, 1985
- 13) *Erich Mendelsohn The Citizens Compendium*, 2011
- 14) Glancey, Jonathan, *Architecture: One good functionalist deserves another*, The Independent
- 15) *Lord Hamlyn of Edgeworth*, The Telegraph, 2001
- 16) Calder, John, *Lord Hamlyn* The Guardian, 2001
- 17) Falk, Jim, *Cassirer and Cohen - draft family genealogy - Person Sheet*. The Times, 2009
- 18) *Bentley Wood*, Parks and Gardens UK, 2012
- 19) Pile, John, *A History of Interior Design*, John Wiley & Sons, 2002

- 20) Wilson, Anne, *London's Literary Village*, The New York Times, 1990
- 21) Elrington, C. R., *Hampstead Frogmal and the Central Demesne*, British History Online, 1989
- 22) Powers, Alan, *Fry, Maxwell, Architect*, Oxford Dictionary of National Biography, 2004
- 23) Powell, Kenneth, *Sir Denys Louis Lasdun, Architect*, Oxford Dictionary of National Biography, Oxford University Press, 2005
- 24) *Ronald William Fordiam Searle*, Wikipedia
- 25) Yeo, Andrew, *Hallfield Estate W2*, West End at War Organization, 2004
- 26) アンドリュー・ローゼン『現代イギリス社会史 1950-2000』川北稔訳 岩波書店 2005
- 27) ピーター・クラーク『イギリス現代史 1900-2000』西沢保他訳 名古屋大学出版会 2004
- 28) A. J. P. テイラー『イギリス現代史 1914-1945』都築忠七訳 みすず書房 1987
- 29) リヒアルト・グルンベルガー『第三帝国の社会史』池内光久訳 彩流社 2000
- 30) 木下壽子『30年代イギリスのモダンハウス』a+u、9808
- 31) コリン・デイヴィス『20世紀名作住宅選集』監修：八木幸二 丸善 2007
- 32) 渡辺研司『30年代イギリスのモダンハウス』a+u、9712 35)
- 33) 塚口眞佐子『モダンデザインの背景を探る』近代文藝社 2012

Behind the Evolution of Modern Design Research into the Circumstances of 1920'-30's a Leading Force by Cosmopolitan in Britain 2

Faculty of Liberal Arts, Department of Interior and Environmental Design
Masako TSUKAGUCHI

Abstract

This paper, 8th issue of the serial work, *Behind the Evolution of Modern Design*, reports further the 1930's British social and cultural circumstances surrounding the modern architecture and housing by viewing additional these 4 cases; 64 OLD CHURCH ST., 66 OLD CHURCH ST., SUN HOUSE and 32 NEWTON ROAD as well as some consideration for the general and suggestive aspects from the perspective view of 7 cases in London including the 3 of previous paper.

Obstructed by conservative personality of the British, the modern houses made a first appearance in Britain at long last around the middle of 1930's, almost one lap behind the continental Europe. Unlike such countries neither was it an organization of designers and manufacturers nor Modernism movement itself but individual architectural practitioners and clients that could play a leading role. Characteristically there existed obvious and significant similarities among those involved; cosmopolitan, highly educated wealthy cosmopolitan especially associated in Jewish or being almost all of themselves immigrant Jewish.

Furthermore, in a period that increasingly saw the Modernist propaganda for the rejection of traditional styles, there was a strong reassertion for historical continuity, which is specifically characteristic of British personality proud of her great history. Thus the achievements by Modernist designers long-living in Britain, bear something historical British to the contrary those by the Nazi-exiles, who were staying short-term in London before settling in US because of little commission offered in Britain.

Either long-dwell or short-stay it is cosmopolitan that made a great contribution toward modern architecture between the World Wars since Modernism itself essentially embodies internationalism by nature.

Keywords: modern houses in Britain, 64 Old Church St., 66 Old Church St., Sun House, 32 Newton Road,